



七瀬 佑衣
nanase yui

海斗とアタシと、ミナミの中心街、番外編【仁物語】

reflection.

- ある、オレが少年だった頃 -

オレは昔、少年だった。

空を知った少年。

ある日、父親に怒られた。

涙が溢れた午後の昼下がり、川べりをただひとり歩いていた。

誰もいなかった。

タイキは塾で忙しかったし、大輔は家で宿題が待っていると不満を漏らしていた。

ため息交じりの毎日。

そんな中、ボクは父親に怒られていた。

大嫌いな勉強も、もしかしたら大好きになっていたかもしれない。

家に帰りたくなかった。

みんな、キライ。

勉強も、キライ。

楽しい毎日。

友達のいる毎日。

笑顔を教えてくれたのに。

涙を教わった午後の昼下がり。

水面で、魚が跳ねた。

ビクッと身体を動かすと、ボクは涙を忘れていた。

しばらく見ていると、もう魚が跳ねることはなかった。

ため息は、なぜか知らない間に覚えていた。

楽しい毎日。

笑顔の毎日。

草原に座って、ボクは水面を眺めていた。

映った空の色が、毎日の空だと気付いた頃。

ボクは、空を見上げた。

空は、ボクを見ていた。

いつもある風景。

白い雲でさえも、ボクに何かを訴えてきた。

いつも空が青いのはなんでだろう、なんて。

ありふれた答えを用意しているのかもしれないのに。

そんな安易な考えを、ただ素直に思えた。

誰かは答えてくれるだろうか。

空が青いなんて、当たり前じゃん。

そっか、ゴメン。

照れ隠しもないまま、また空を見なくなった。

ただ、まだ少年だったあの頃。

ボクは、初めて空を知った気がした。

だからこそ、空はいつも在り続けるだろうし、だからって、空が毎日在ったなんて思うはずもなかったし。

毎日、過ぎたことを、今ただ、感じるだけの毎日。

「仁」

振り返ると、いつもの仲間が笑っていた。

現実から逃げた日。

「だる～」

ふいに、どこかから聞こえてきた言葉。

何気もなく、きっと誰かは発する言葉だから何も感じることはないけど、いつもお決まりの毎日だとちょっとつまらなかつたりした1日の始まり。

だるければ、何もする気力もわかないと知っているのに、そんな無防備な発言を口にするそいつに言ってやりたかった。

おまえがだるいよ。

「最近、どうよおまえ」

いつも変わらない笑顔を見せる海斗でさえ、今のオレを知らないでいるのかもね。

「仕事人間になりたいわ」

「毎日楽しいの？」

「何がや。楽しいわ」

今日の姿見で一番気になる髪の毛の具合が、少しよくなったと感じた頃に、毎日の会話にいったいどれだけの価値があるのかと考え始めていた。

同じ会話は存在しなくて。

いつもは変わりなく過ぎていて。

でも、毎日は同じ会話から始まる1日。

みんなはいつも変わらずにいて。

でも、きっと同じ言葉では言い尽くせない大切な一瞬だってあるのに。

そういえば、今日は少し違ったヤツがいた。

何か、思う日々があるのなら。

誰だって、それは感じる一瞬でしかなく、そして誰もがそれを感じるそのものであると知れば、オレは何かを悟ることもできるだろうか。

誰にも言わない言葉だってあるし。

誰にも言っていない想いだってある。

将来なんて、きっと誰もが同じ価値を見出して、同じ夢を同じかのようにして見せておいて、実は少し違う瞬間を感じたといえ、それは自分だと言えるオレにしてみたかった。

変わらないのがそんなにいいの？

でも、変わりたいって、なんで？

変わるの、マジで？

聞いてみるその一瞬に、引いてしまう自分の本心。

冷めた言葉なんてありふれてる。

でも、きっとそこには本心である自分なんて存在させないのかもしれない。

「新品じゃん、その帽子」

鏡を見ながら、前にも聞いたことのある海斗の言葉に、ため息のひとつも出していいのか迷うぐらいに、ありきたりな場面を意識せざるを得なかった今の瞬間。

「新品ちゃうよ。2度目や」

「男前やなあ、おまえ。どんだけこだわってんねん、帽子に」

笑われたその一瞬にも、価値は在り得るのか。

無言なんて当たり前で、でも何となく心地のいい空間を何も感じないほどにしてしまいたかった。

「おまえらの変化なんていらんわ」

いきなりな発言をいつもの調子にしまえば、誰かは少し不満を口にしたらどうか。

誰がオレをわかってくれる？

誰がそれをわかるって言うんだらう。

わかるわけがない。

わかったら、言ってやる。

おまえなんかにはわかってたまるか。

毒は、何かを制している。

いつも、曖昧に濁して笑顔をぶつけるオレの一瞬の間に。

初めてのセピア少年。

色褪せない記憶は山ほどある。

そりゃあ、誰だって思い出のひとつもあるに過ぎない。

遠い過去だって、思い出になりたがらない記憶だというリアルさを身にしみてわかるほど、そんな人生経験も豊富ではないけど。

誰かと歩んだ季節だとか、誰かと共に過ごしてきた毎日だとか。

そんな表現も、尊い思い出に変えるほど、いい思い出だと豪語した自分も、過去に何人かいたような気がする。

オレは、何人の自分を抱えているんだろう。

それを乗り越えたら、ある日突然リアルな自分に出くわした。

少年は、いつも鮮やかな思い出の中にいた。

いつも笑っていたわけじゃない。

いつも楽しかったわけじゃない。

だけど、人を通していくつもの道を歩んできたように思う。

それを誇りに思うかどうかを問われると、どうしてそんな答えを導き出せるのかをまた真面目だと思いこんだ自分が勝手に導き出していた。

オレは、何人を自分に置き換えたんだろう。

まるで、少し歪んだ少年を意識してしまう。

鮮やかさは、まるで自分を尊い過去に変えてしまったかのように、少年時代はごく普通の笑顔が似合う少年だったといえるだろう。

それを誰に言わせてみたって、ごく普通だと言いたかったらしい。

飛び抜けたものもなく、かと言って埋もれたがる少年でもなく。

誰かの後をついて回ったわけでもないし。

信念を貫く精神を養えと言われると、回避する方法を常に考えていた。

少年はある日、思い出がセピアになることを知った。

時間が経つにつれて、思い出が鮮明なものだと思っていたし、毎日は実は楽しかったんだろうし、いつまでもみんなのこと忘れないよ、と言いながら、そんな少年を過ごしていた。

何気ない毎日の中に存在した、何もない1日。

誰かが、それを知ったわけじゃないし、その日が特別でもなかったかもしれない。

毎日は、ごく当たり前のように過ぎていた。

学校の帰り道、雨上がりの午後、雨はあがったし、空はスカイブルーを意識させていて、雨が上がった後の湿った空気に憂鬱感是最上級を指し示していて、道を歩いている自分は誰かに見られていると感じていた。

そこにいたのは、誰だったんだろう。

あとで、そんなことを考えたような気がした。

夢だったか、現実だったか、そこには確かにオレの記憶が残っていた。

そこは、オレのいた世界だったし、いつもの風景には少し違うピースがあてはめられたかのよう
に、幻はオレを創造してしまったかのように、風景は切り取られた絵本のように、そこに色を
塗ることはなかった。

セピアは、どうして生まれたんだろう。

オレは曲がってなんかない。

ただ、楽しい日々を過ごただけなのに。

誰かは、今が楽しいと言った。

それを傍観するオレとして、そいつもオレを見ていたに過ぎない。

だって、そんな傍観するオレにだって、そいつは何かを思ったに違いない。

言葉が悪い？

ごめん。

オレって、やっぱちょっと曲がってるのかな。

オレがそれだと言いたくてさ。

なんかさ、オレは大阪に生まれて、大阪人に似ない奇妙を抱えてるね、とよく言われた。

大阪が好きだなんて、よく言えるよ。

彰吾のバカ笑いが時たま気に障ることあるしさ。

瑛太の話に耳を傾けた時の、少しリアルさの残る現実感が、たまに恐怖へと変わったことだっ
てある。

毎日、何を考えてるのかわからない海斗の笑顔を、何の躊躇いもなく安心に変えた時の、あの無
防備さに誰かを求めて焦りを感じたこともある。

影響って、オレが感じた一種なんだから。

何も、誰かのせいにしなくても。

だからといって、オレってどんな影響をみんなに与えているんだろう。

怖くて、聞けるわけがない。

過ごした毎日を笑顔に変えるだとか、いくらでも言えると表現したオレを見てほしい。

そんな、オレになったりして。

そんな自分を、そりゃあ見せるわけないし。

セピアの話は、誰に言えるものでもない。

そんな思い出を持つオレであることを知らないみんなは、きっとそんなオレを見てまたいろんな
オレになるんだろう。

言われたって、オレじゃないしね。

前に、海斗が言ってたっけ。

『将来の夢について』

目の前で、海斗がそう口走った。

マジで、オレって最近いろんなことをホント考える。

セピアの話をしていたっけ。

それなのに、そんなセピアになりかけている『将来の夢について』。

それは、現実に帰らないのかな。

ちょっと、将来に不安を抱えるよな。

オレ、ちょっと疲れてるらしい。

休暇届け、出してみようかな。

もう、いいや。

考えたくない。

今が大切。

なんか、そう思って。

憂いのimitation.

思い悩んでいた。

きっと、沈むなんて言葉があり得ないほど、オレの心はまだ余裕すら見えていたけど。

ほんの少しだけ、imitationを意識して。

そんなオレの言葉でさえ、人は笑うかも。

悩むって、なんやねん。

半笑いのまま、海斗が口にすることがあった。

少し滑稽に見えて、みんなが一斉に笑った。

みんながimitationに見えていた。

それでも、本心からオレは笑っていた。

imitationはどっちだろう。

オレかな？

そんなことを、難なく思っていて、そして、言葉なんていらなかった。

言葉に、imitationは尽きない。

誰かが言葉にして発言した心の声も、もしかしたら本当の声だったのに、オレは敢えて本心だと思わなくしていた。

オレって、なんて性格が悪いんだろう。

いつからだろう。

ちょっと、ヤバいと思っていた。

人に優しくするなんて言葉が主流だった頃、そんな頃なんてあったっけ？なんて思っている間に、もしかしたらオレは知らない間に人に対して優しい気持ちを抱いていたかもしれない。

ある日、大好きな人から言われた。

『いつも、笑顔でいて』

・・・なんだ、それ。

オレに笑顔なんて似合わないよ、なんて、ちょっとそんなことを思っていたら、本当に人に対して優しくすることの意味を知ってしまっていた。

imitationなんていらないや。

何やってんだろ、オレ。

本気で生きないと、人生もったいないや。

誰かから教わったんだろうか。

オレの記憶は曖昧で、でもどこかにいつもの風景はあって、そして、そこにいつもの笑顔が存在していたように思う。

どこかで、きっと学んでいた。

人生という、少し難しいテーマを。

・・・オレって、何だろう。

ちょっと、笑ってみた。

笑顔って、いつも必要なのだろうか。

誰かはきっと笑ってるだろうし、オレが笑う必要もないよと、どこからともなく言われたような気がしてたからさ。

ちょっと、昔の名残を垣間見て、そして新たな自分に気付いた。

スタートはいつもふいにやってきて、いつの間にかそのレールを進んでいて。

踏み外すのを恐れて、何やってんだ勝手に、と少し焦燥感というありふれた感情を抱き、そしてまた眠りに就いたなんて言葉を思い起こしてみると、毎日は同じサイクルを描いていると、ふと誰かから教えられた。

気付けば、もうこんな季節。

外は寒くて、暑くて、暖かくて、涼しくて。

いつの間にやら、季節なんて忘れていた。

いつも忙しいなんて言って、また誰かと出会って。

人は別れることを意識するのか、しないのか。

悲しみなんて、いつやってくるのかわからない。

季節なんて、関係ない。

出逢いと別れなんて、ありふれてるなんて言えるのかな。

オレに、悲しみを抱くことがあるのかなんて。

もしかしたら、涙を恐れて人と出会うのを拒否しているのかな。

今、いる彼女は4人目だ。

でも、別れを口にするのはタブーだよと、念を押しつつ、オレは臆病者だと言ってるようなものだ。

オレって、イケてるの？

ちょっと、不安だな。

ま、オレだけを見ている彼女を眺めていると、毎日は幸せ者だと、少し自分だけの幸せを噛みしめていたり。

そういえば昨日、瑛太がリアルな言葉をまた口にしていた。

『なんか、いいことないかな・・・』

しんどい。

ちょっとだけ影響のある言葉を、平気で口にするんだからさ。

毎日が懸命な努力を強いられる人間がそこにいたらどうするんだよ。

いつか、言ってやらなきゃいけないかな。

本気で人生を考えたこと。

あまりないけど、でも。

imitationなんて言ってるオレも、少しは成長して、そんな言葉を口にしない日がやってきたら、本気で人生を共に歩む人がもうそこに存在しているかもしれない。

そこに仲間がいて、少しは成長した姿を見せているのかもしれないしね。

いつか。

また、成長できる日を。

そして。

彼女と、永遠に、共に。

空を思い出した少年。

雨不足な毎日。

毎日、暑くて。

枯渇という文字を思い出しては、それではないんじゃない？なんて思いながら、それでも素知らぬふりして、毎日を過ごしていた真夏。

夏休みは、あっという間に過ぎて行って。

終わりを告げるまで、あと10日というある日。

初めての、大好きを口にした日。

二人の道のりなんて、ただちっぽけな二人だったし。

でも、笑顔は一番のもので。

大好きだった言葉を、ただ口にただけ。

二人の間に生まれたものを大切にしよう、なんて。

初めて想えた時だったけど。

夏休みは、ただその日のためだけにあったような。

ただ、空からはまだ雨は降りてこなくて。

雨を乞うようにして、空を眺めた記憶。

二人が選んだ道のりは、ただ小さな道を選んだだけのものだったし。

それでも、大きな人生の岐路に、呆然と立ち尽くすかのようにして迷った毎日。

その中に、二人は存在していた。

小さなものは、大きなものになっていくのかな。

好きだと知った想いを、ただ二人で過ごした夏。

涙なんて遠くて。

二人で、ただ笑い合ってたっけ。

気付いたら。

空が曇っていた。

雨が降った時、二人の間に何かが生まれてた。

あまり、口数も豊富ではなかったけど。

沈黙だけの部屋の中。

少ない言葉でつないだ想い。

帰り際に聴いていた、二人だけの曲。

明日も、また会おうね。

うん。

別れた後に、降った雨。

空を仰ぎながら、初めて感じた夏休みの途中。

涙なんて遠くて。

ただ、切なさもまだ知らない少年。

会いたいなんて、言えなくて。

『枯渇』が脳裏をかすめて仕方がなかった夏休み。

今度は、いつ雨が降るんだろう。

・・・雨は、なんで降るんだろう。

控え目に、少し考えてみた。

そんなどうでもいいこと、ま・・・いっか。

最後の夏休み。

初めて、知った夏休み。

また、進む毎日。

なんで、日々は進むんだろう。

時たま、進むことに疲れて。

でも、休むことに恐れを抱いて、なんで日々は進まなければいけないんだろう。なんて、また疲れたままに夜を越えて。

枯渇の文字を忘れた日に、彼女が泣いた。

そんな、大それたことではないけど。

一応、オレも恋をしているんだな、なんて。

そんな、とってつけたように泣かなくても、さ。

二人は、ケンカをしたんだ。

雨は、一応降らなかった。

だけど、いつもの暑さにいつもの日々を感じることを求めている、早く仲直りがしたかったから。

『ごめん、また一緒にどこか行こうよ』

ありふれた恋。

ありふれた仲直り。

でも、一応幸せで。

でも、少しつまらなくて。

恋なんて、言えるのかな。

でも、15歳のオレは恋をしていたんだ。

思い出は、ただ初めて歩んだ二人の道っただけで。

それからの日々に、二人の記憶は埋まらなかった。

今も、幸せで暮らしているのかな、あいつ。

会ったら、きっと、どうするだろう。

無視しちゃったら、サイテーだな。

今進む毎日では、海斗と優里の間に愛が芽生えていて、彰吾と彩花の行く末を不安に覚えていて、人生を語る瑛太のリアル話に少し憂鬱を覚えていて、少し笑って。

オレは今、大切な人と生きていて。

あと、どれくらいしたら、将来を想うだろう。

二人の間に、大切な気持ちを抱くことが、こんなにもいいものなのかと、感じた現実感。

幸せは、今であるのか。

幸せは、記憶にある少年だった頃の自分？

15歳の初恋は、ただ1度の通り過ぎた夏休みの1ページ。

色褪せることを恐れない、オレの記憶。

また、いつか、会おうね。

そんなこと、言えないよね。

いつか、幸せでいてください。

いつか、いつまでも幸せを実感していてください。

会うことがあっても、また笑顔で。

二人の、違う道のりが、ただ幸せであるように。

願ったのは、同じ夜を二つの違う場所で生きている、二人それぞれの違った願い。

また、再び思い出す時。

違う瞬間に、二人は同じことを思い出すのかな。

オレも、またこんなことを、いつかどこかで思い出して。

大切だった日々の、二人だけの道。

感じ方、考え方、想い方、過ごし方。

すべて違ったけど、二人はただそんな記憶だけでつながった大切な二人だった。

いつか、会えればいいね。

笑顔で。

いつか、言えたらいいね。

『また、会おうね』

雨もまた、あの頃のような雨であれ。

いつか、変化する時。

同じ一瞬。

同じ時間。

同じ自分。

同じ人。

同じ毎日。

同じ明日。

いつもの変化は、何気なく過ぎてしまっていて。

成長は、口に出すほどのものでもなくて。

毎日は、変化のない毎日。

それでも、人は変化を求めて生きていて。

そんな大それたことでもないのに、毎日の変化に少しの不安を覚えて、それでも生きていて、何かを求めるあまりに幸せをもらっていたりして。

それでも、人は幸せではないと訴えていた。

何を、それほど大きく抱えているの。

オレは幸せである。

言ってみれば、バカ笑いされた。

求めたものは、毎日の幸せ。

それほど、人を求めたこともなく。

それほど、毎日に刺激を与えられたこともないけど。

人は、みんな成長する。

そこに自分がいて、みんなが進んでいて、そこに自分が進むことを恐れたり、焦ったり、進む過程を意識して、またひとつ成長の意味を見失ったり。

いつか、進む目的を見失い、何がその意味なんだろうなんて言葉を口にして、少し外した道を人は少しの安定も求めずに、心にしてしまえば、自分を感じることもできなくなって。

誰かにしてみれば、オレは少し尖っていたりするとも言うし。

また誰かにしてみれば、オレは真面目な人間だと言う人もいる。

少し冷めた笑いを表情にしてみれば、おまえわかんないやつだな、なんて一言で片づけられたりもした。

オレは、わかんないヤツだ。

誰も、笑ってくれなかった。

そういえば、瑛太はいつも何かを考えている。

見つけるものは、いつも何か吹っ切れないものばかりで。

いつも、楽しいの？

聞いてみたことがある。

『・・・まあ、楽しいよ』

性格って、不思議だ。

誰が好きとか、嫌いとか。

そんなことを言えるくらい、性格はいろんな形で人を形成する。

オレの好きな人。

いっぱい。

オレの嫌いな人。

一部。

そんな分別のつけ方も、一種オレの性格が成り立った理由なのかもしれない。

オレは尖っているのか？

オレは真面目人間？

オレは。

素直じゃなくなってる。

もう、随分と前から。

少年は、空を見上げて泣いていた。

ある時、毎日の一瞬に影を見つけた。

人を好きになった少年は、再び空を思い出した。

幸せは、いつか自分を形成してくれるだろう。

夢はないけど、毎日は変化のない小さな幸せの積み重ねだったりする。

変化した時。

幸せは一瞬にして隠れてしまって。

見えてきた自分に、少し戸惑って傷ついて泣いて沈んで、また浮き上がって、そして変わらない毎日はそこにあると気付く。

何かが変わったとしたら、少し何かを知った自分。

成長は、どうやって自分を形作るのか。

そんなことを考えていたら、ある時自分が壊れてしまった。

もしかしたら、可能性は大きかったのに、自分を忘れる一瞬に成長の意味を知らずに、そして形成は少し剥けない自分として。

・・・まあ、そんな妄想過程を得たとしても。

それもまたひとつの自分形成とする、自分確立論理のひとつの定義だった。

壊れることを恐れる前に、オレは笑ってる。

誰かがそばにいる。

誰かを愛して、そしてオレを愛して。

絆はそれほど口にする人ではないけど、口にするとしたら、オレのたったそんな人だったかも。

誰かは変化を求めて、そこにオレはいなくて。

でも、変化することを応援して、そしてオレはそこにまたなくて。

それでも、オレが変化する時には、いつもそばに誰かがいたんだ。

みんな、そばにいて。

毎日是有りふれていて。

毎日に変化のない日々を願って。

そして、自分の変化を意識したら。

そこに、みんながいたりして。

笑ったり、楽しんだり、泣いたり、怒ったり。

でも、やっぱり幸せは、人を愛することなのかな。

少年は、いつか愛を知って、そしてそこに生涯を置くんだろう。

最期の日は、愛する人と。

願いよ、永遠に。

出会った理由。

出会うなんてこと、よく言うけど。

今までだって、たくさん数、出会ってきたけど。

大人になって出会ってきた数と、大人になる前に出会っていた人たちの数はそれほど大差はなく。

ただ、出会いそれぞれの意味は少し違っていて。

それぞれに意味があるなら、自分が今まで生きてこられた分だけその理由もあったかもしれない。

大人になるために生まれた理由があるなら、大人になった分だけオレには幸せがあったのだと思う一瞬がある。

少年と呼んでいたオレの時代にも、いつか大人になるための一瞬があると知っていて、いつか大人になった頃、オレの人生はきつとこんな感じだなんて、少し笑いながら答えているかもしれなかった。

大人になりたかった少年だと言うなら、そんなわけないとまた笑って言えたかもしれない。

少年のままで、いつか大人になる頃までに、いつの間にか大人になっていたんだなんて、少し笑いながらまた納得しているかもしれなかった。

緊張感もないままに、大人になっていた。

ただ、自分個性が大好きで、人とは少し違ったことだけに夢中だった。

月1で髪の色が変わって、形は毎日の変化だと言っては髪型を変え、自分のビジュアルを意識できるからこそ、人の価値だって理解できるんだと少しわかったようなフリをしながら、毎日人の髪の毛を演出し続けていた。

出会った頃。

印象だって、大事だった。

一見して不機嫌を全面に出していた海斗との出会い。

寡黙だと思い込んでいたら、笑顔が爽やかだった。

逆に寡黙になってたら、海斗からメアドを聞かれて、適当に友達を作ってる自分と、よくしゃべる海斗の爽やかさと、自分の適当加減な今の人生論理。

『飲みにいこや』

『ええけど・・・誰かおらんの？』

『初めてで、それはないやろ』

『なんでやねん。誰か誘ってや』

『いきなりってさ、おまえ・・・。少しぐらい、親睦深めよや』

ニコリと笑って、海斗はオレにそう告げた。

『・・・ま、ええけど。でも、オレあんま、そういうのない人やで。特別やで、おまえ』

そう言ってフツと笑うと、海斗がゲラゲラ笑っていた。

印象深いといえば、海斗のその瞬間のゲラゲラ感がどう入ったスイッチなのかを真面目に考えていたその時のオレがいた。

笑う海斗と、笑ってる感があまりないと見えた、オレの考える姿のその一瞬。

印象は、そんな間に生まれていて。

そんなどうでもいいやりとりに、誰がいったいその価値を見出すんだろう。

親睦は、滞りなく深まった。

それからの日々、いろんな仲間との出会いもあっただろうし、案の定、短期間恋愛も経験した。何となく。

それでも、日々は楽しかった。

本当の出逢いまではまだ程遠かったけど、海斗や瑛太、彰吾のそれぞれの人生論や、その生き方に、何となく、毎日につながってたように思っていた。

瑛太との初めての出会いは、ただ同じ匂いを醸し出す雰囲気の瑛太にとって、オレはどんな印象を与えているんだろうと、そればかりが頭を駆け巡っていたのを覚えている。

『七変化の頭がかっこええ』

ただ一言だけ、そう言い放ったきり、瑛太は何も言わなかった。

もっと、七変化にしてやる。

彰吾の奔放さに、ただ楽しさよりも尖った自分を見せてやりたくて、ちょっとやそっとではおまえの笑いを認めてやらなかったら、彰吾の奔放さに、自分も奔放になっていて、そんなつまらないオレを砕いた彰吾のバカ笑いを笑っていた。

毎日、楽しかった。

出会いなんて、数知れず。

だけど、大切な日々の中には、大切な出会いがあるということに、いつか気付くんだろう。

オレには、そのそれぞれの出会いが、すべての大切さにつながっていた。

そんなこと、誰が知る？

言うわけないわ。

言ったら、誰が認めるっつうの？

笑ってくれたら、本望。

だって、そんなオレだしさ。

それが、オレだって言ってるしね。

何が認める、だろう。

・・・オレって、ある種、本心を言うことの少なさに、その価値があるって言えるのかもしれない。

悲しみって、こんな時に使ってもいい言葉？

でも、本当に本心を言った時の価値は、もしかしたら一生のうちに誰かと出逢う本当の意味を知れるくらいに、貴重だって思ってよ、なんて。言ったら、たぶんオレはもうその時点で、話し合う価値を損ねる人かも、ね。

オレって、なんで生きてるんだらうね。

笑っても痛い。

痛いオレを、少しぐらいはわかってくれる存在も、必要だしさ。

誰が、その相手だらうか。

海斗がまだ、理解者だって言えるかも。

笑うしさ、アイツ。

オレ、笑ってほしくないんだよね。

それなのに、そこがわかってないんだよね、アイツ。

ま、そこそこ、仲良し組になってきたけどさ。

また、夜顔になって、アイツの一面を知るのかな。

深まる仲も、いいかも。

少し笑顔のオレを、また理解してよ。

・・・そろそろ、眠ろ。

いつかを夢見た少年たち。

いつも、奔放だった。

無邪気に笑って、楽しく過ごして、そこにはいつもの仲間たちが駆け巡っていた。

いつか、雨が止んだ時を知っている。

いつか、雨雲に恐怖感を抱いたこともある。

太陽を待ち望んで、降り止まない雨を眺めていた記憶や。

友達とケンカした日も、変わらず空には太陽があることに気付いたり。

泣いた日には、友達が優しくかったり。

怒った日には、初めて心の傷を知ったりした。

思い出なんて、なくてもいいと思っていた。

感じることなんて今でしかないと、日々は知っていくって何気に思っていたし。

それを感じた頃に、思い出なんて忘れちゃいけないって気付いてしまって。

焦りなんてないって思えば、人はいつかどうしようもない状況を、傷つけながら、痛めながら、ただ自分を感じていくことでしか自分を理解していけない状態を知って、初めて成長を知るって、実はそれもまだ曖昧なまま、人生論の結末思想を抱く少年が、成長も知らないままにそこに存在していた。

少年は、よく笑ってた。

オレは、楽しんだのかもしれない。

自分が大好きで、人を楽しくて。

そう思う自分が、ふと気付いた時に、人をホントに好きでいたのかはわからないでいた。

自分は確かにそこにいて、人を意識した時、もしかしたら傷つくのはオレ自身なのかもしれないと考えていた。

人はみんな、オレではないって気付いた。

誰が、オレを認めてくれるんだろう。

誰かはきっと、オレを好きではなくなった。

いつか、オレの感じたことが、その一瞬に人を嫌いになったその瞬間であると、オレは気付いてしまったから。

誰かを好きになったこともある。

人を好きになるって、きっと簡単ではないことに気付くんだ。

オレには、夢があった。

人を感じられなくなった瞬間や、そこに人が存在しなくなった時。

オレは、きっと笑顔の似合うあの頃の少年に戻りたいと思っただろうか。

少年であるオレを、誰かはきっと愛してくれていた。

少年はそこに存在していて、いつかはオレに帰るだろうか。

少年に帰る頃。

オレは再び、あの空を見るのかな。

泣いたら、霞んでいたし。

笑ってたら、輝いて見えたし。

悲しんだ時、色は消えていた。

怒ったことなんて、あまり記憶にない。

だけど、その時にはきっと空は見えないでいたんだらう。

少年は、あの空の下にいる。

今は、笑っているだろうか。

空が見えない日はなかった。

いつかは、笑顔でいられた毎日。

人を好きでいられた日々。

いつか、どこかで見ていた空が、今もまだ続いていたりした。

自分は今、空を見ている。

少年は、少し考える大人になっていた。

あどけなかった頃を、時の止まった世界に置き換えて、オレはそこに自分自身を見ていた。

いつか、帰る場所。

いつか、オレは少年に出会うだらう。

笑顔で、オレに向かってくるだろうか。

生意気な奴だな。

そう言って、オレの愛情を、少年は心から感じとることができるだろうか。

愛情は、何のためにあつたらう。

少年は、知らなかった。

人がいたことや、笑顔を感じた日々の大切さ。

オレは、知らないでいられた。

人を知りながら、人を知ったようにせず、人を愛して、人から愛されることの大きさを知っていた。

少年は、知つたらうか。

あどけなく生きた一人の人間を。

オレは、知っていた。

空に気付いた頃、そこにオレがいたことを。

いつか、オレがいたことに、誰かは気付いてくれるかな。

少年が笑っていたように、オレが生きた少年だったように。

ある、オレが少年だった頃。

空には大切な希望が浮かんでた。

reflection. - ある、オレが少年だった頃 - / WORLD END.

END.



reflection.

— ある、オレが少年だった頃 —

著者：七瀬佑衣

電子書籍プラットフォーム：ブクログのpapier
運営会社：株式会社ブクログ